

ヨハネの黙示録 第22章 20節

「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。」

かなり前のことになるが、朝を迎えるのに期待なく、望み無く、疲労感だけで目覚める日が続いていた。朝日が窓辺を照らす、ここは重苦しく、闇のまま、足は引きずるように重い。混雑する通勤電車に詰め込まれて、長時間揺られてゆく道は朝の倦怠感にさらに重くのしかかる。期待なく、目指しなく揺られては行き来する生活にはほどほど参ってしまった。陽は真上に上り、夕暮れがおとすれ、暗くなったの帰宅の繰り返しに期待は転がっていなかった。

そんな日に、語りかける方がおられた。「これらのことをあかしする方がこう言われる。」島流しにあり、幽閉されたであろう者に、ここでわたしと言うお方が語る。獄中であって、ひかりも将来への期待も抱けない状況にある者に言う、「しかり。わたしはすぐに来る。」確かに、わたしは来る、それも、すぐである。

獄中にある者のところまで来られて、将来の約束を、しかり、と言ひ。すぐに、と言ひ。来る、と言われる。状況がいかであろうとも、期待は確かである。人々は言う、アーメン。主イエスよ、来てください、と声をあげる。

2023年4月22日